

魔法のダイアリー プロジェクト 活動報告書

報告者氏名:伊勢 太惇

所属:市川市立新浜小学校

記録日:平成31年2月26日

キーワード:読み書きの支援, コミュニケーション

【対象児の情報】

○学年 小学校6年生

○障害と困難の内容

◎知的障害, 注意欠損多動性障害(AD/HD)

○障害と困難の内容

- ・音と文字の一致が難しく, 読み書きにおいて困難さが見られる。自分の考えを文字にしたり, 聞いたことを書いたりすることが難しい。
- ・自分の思いを相手にうまく伝えることができず, 家庭で癇癪を起こし, 暴れたり自傷行為をしたりする。
- ・積極的に自分の気持ちを伝えようとする意欲はあるが, 語彙の少なさや言葉をうまく繋げないことから相手に自分の意志を正しく伝えられないことが多い。

【活動目的】

○当初のねらい

- ・思いを伝える手立てをもつことで, 「伝わる」見通しがもてるようにする。
- ・必然性のある状況で, 自分の思いを発信したり, 相手の思いを受信したりする機会を増やす。

○実施期間 平成30年6月から平成31年2月

○実施者 伊勢太惇

○実施者と対象児の関係 担任

【活動内容と対象児の変化】

対象児の事前の状況

【読む】文字を見ながら1文字ずつゆっくり読むことができる。漢字やカタカナが混ざると読む意欲が下がり, スピードも遅くなる。

【書く】ひらがなを書くことができる。1年生レベルの漢字を練習しているが習得が進まない。

書くことに対して強い抵抗感がある。自分の考えを文字にすることは教師の支援があるとできる。

【話す】自分が興味関心のあることを脈絡もなく発言することがある。2 語文であれば話すことができる。

話すことは好きだが, 語彙の少なさから, 言葉が浮かんでこないため, どう伝えたらよいか分からない。サ行がタ行になる。口や舌の形状から正しく発音できない。

【聞く】教師の指示を聞いて, 正しく行動できることもある。話の全体の流れを理解するのは難しく, 話の中で自分の知っている言葉が出てくるとそれに対して反応することが多い。

【行動】新しい環境に対して不安に感じる人が多い。

動作を真似たり, 特徴をおさえて身体を動かしたりすることが得意。興味関心の幅も広く, 積極的に挑戦することが多い。

身のまわりの整理整頓が苦手。興味関心が短時間で移り変わり, やりっぱなしになることが多い。

「読む・書く・話す・聞く」の全てにおいて困難さが見られる。その原因として、音と文字の不一致やワーキングメモリの低さが原因であるように思う。そして、積極的に自分から思いを伝えようとしているが、相手にうまく伝わらないもどかしさが日々のストレスの原因となっているように思われる。そこで、思いを伝える手立てをもち、伝わる見通しがもてるようにする。そして、必然性のある状況で思いを発信したり、受信したりする機会を増やすことで、なりたい自分に一步步進んでいく経験を積ませていきたいと考えた。

活動の具体的内容

1. 思いを伝える手立てをもつことで、「伝わる」見通しがもてるようにする

(1) 文字の習得を目指して

「音と文字の一致」をしていくために、「たのしい！ひらがな」「ひらがな・かたかな(おけいこシリーズ)」のアプリを活用する。漢字練習は、小学生手書き漢字ドリル DX を活用する。

(2) 50音キーボードの入力の習得

自分で調べたいものを、50音キーボードを使用して検索する。
連絡帳を書くときは、50音キーボード入力して作成する。

(3) 多様な表現方法をもつことで「伝わる」見通しをもつ

「By Talk for school」を活用し、気軽に自分の思いを伝えられる場所とする。
「こどもレター」を活用し、相手がいることを意識して文字を自分で書く。

2. 必然性のある状況で、自分の思いを発信したり、相手の思いを受信したりする機会を増やす

(1) 自分の知りたいことを自分で入力し、調べることができ 調べたことをいろいろな表現(文字・写真・音声など)でまとめていく力をつける

「サファリ」を使用して、夢について知りたいことを検索する。
警察官に聞きたいことをインタビューシートにしてまとめる。
校外で実際にインタビューをする際には、「UDトーク」を活用し、正しく理解する。
「keynote」で夢についてのスライドを作成する。

(2) 自分なりに思いを伝えたり、相手の思いを理解したりするために、自分なりに手立てを活用していく力をつける

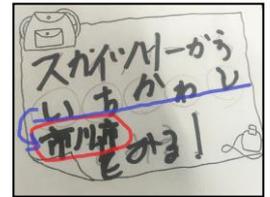
★学校お助けマンになろう！
「word」でインタビューシートを作成する。
インタビューの事前練習を、動画と原稿を活用して行う。
学校の中で様々な人にインタビューをする際に、「UDトーク」を活用し、正しく理解する。
困っていることを理解し、なにができるかを「ロイロノート」でまとめ、実行する。

活動内容と対象児の変化

1. 思いを伝える手立てをもつことで、「伝わる」見通しがもてるようにする

(1) 文字の習得を目指して

音と文字の一致をしていくために、「たのしい！ひらがな」「ひらがな・かたかな(おけいこシリーズ)」を活用した。鉛筆を使わず、端末になぞって書く学習は書くことへの困難さを軽減し、とても意欲的に学習を進めることができていた。なぞると絵が動き始め、頻繁に音のフィードバックがあることは、丁度よい刺激量となり、継続的に学習を進められることができた。



漢字練習は、「小学生手書き漢字ドリル DX」を活用した。このアプリは、漢字を指で書いて入力するところや正確に書けなくても類似している漢字を表示・選択できるよさがあり、本人が学習を継続する大きなきっかけとなった。新しい漢字を勉強するときには、机の前にホワイトボードを置き、担任と漢字の読みと形を確認した。アプリで問題を解いているときに、思い出せないときには、ホワイトボードを見て確認し、なぞって入力することができた。また、まずに対して小さく書いてしまったときでも、類似している漢字を複数提案してくれ、その中から自分が書こうとしていた漢字を選ぶことで、意欲が途切れることなく継続して学習を進めていくことができた。



漢字練習において、漢字ドリルを使用した学習で読みが分からないときは、「漢字検索」を使用した。読みが分からない漢字を指で書いて入力するところがとても使用しやすかった。先生に質問をしなくても、自分で調べて、次の問題に取り組むことができるという見通しを持ってたことがとても良かった。



(2) 50音キーボードの入力の習得

毎朝、生活ノート(日付・教科)を書いている。書くことへの抵抗感がとても強かったので、繰り返し決まった内容を書くことが多くなる生活ノートを「word」で入力していくことにした。フリック入力よりも、50音がすべて書かれていて、そこから選べるキーボードの配置が適していた。アプリ導入前は、生活ノートに取り組まないこともあったが、今では進んで生活ノートを書くことができています。また、50音入力の習得ができたことで、鉛筆をもって書くことへの意欲も高まった。生活ノートを書く際に「タブレット端末を使う」または「鉛筆で書く」を自分で選択して取り組んでいる。記録によると、タブレット端末を使うことをメインにしているが、鉛筆で書くこともたまにあることがあることが分かる。筆跡から「書く」作業へ集中できてきていることがわかる。



(3) 多様な表現方法をもつことで「伝わる」見通しをもつ

「By Talk for school」を活用し、気軽に自分の思いを担任に伝えられる場所とした。アプリを使用する前は、休日にあったできごとを担任に伝えようとするが、行った場所の名前や内容を表す動詞が分からず、うまく伝えられないことが多かった。初めてこのアプリを使用した際には、使い方の説明と文字以外にも絵文字・スタンプ・写真などの送り方を確認した。アプリ導入時には、50音キーボード入力の習得が進んでいたため、予測変換機能を活用しながら、文章を組み立てていた。スタンプを使用して自分の気持ちを伝えることが少しずつ増えるようになり、嬉しかったことや印象的だったことを写真で送ることがよくあった。文字だけでなく、スタンプ・写真をあわせて使用することで多様な表現方法をもつことができ、伝える楽しさを感じることもできた。



また、ネガティブな感情表現もスタンプを使用して表すことも増えた。(お腹が痛い・勉強が難しいなど)だんだんと自分の気持ちを伝えるツールとして活用できるようになってきている。



週に一度、土日の絵日記の宿題をする際には、母親と文章を考え、ますの横に小さく書いてもらい、それを見ながら文章を書いていた。文章を書く活動を自力で行うことはできなかった。「こどもレター」を活用し、相手意識をもって文字を自分で書く練習をした。1学期のまとめとして、1学期にがんばったことと2学期にがんばりたいことを書く学習をした。このアプリでは、原稿を入力した後、一文字ずつなぞっていくようになっている。原稿は担任と一緒に考えた。「なぞる」ことが書くハードルを下げたことや、自分の筆跡が残ることなどが意欲的に学習を進める要因となった。また、手紙を書いた後、お母さんに見せると「すごいね！」と褒められ、自分の考えを文章にして書くことができたという達成感を味わうことができた。このアプリを使えば、文章をかくことができるという自信を持つことができた。



小学校では、漢字ができるようになりました。書くことも好きになりました。中学校もいってもがんばります。漢字をかんばります。二年生の漢字をかんばります。計算をかんばります。さくらんぼ計算をかんばります。

2. 必然性のある状況で、自分の思いを発信したり、相手の思いを受信したりする機会を増やす

(1)自分の知りたいことを自分で入力し、調べることができ 調べたことをいろいろな表現(文字・写真・動画)でまとめていくことができる力をつける

警察官にとっても興味があり、将来の夢は警察官と周囲に話している。進学予定の中学校の先生が、学校に訪問する際に自分の夢を発表する機会を設定し、それにむけて夢についてのスライドを作成していった。警察官の制服・持ち物・乗り物について強い関心があるので、2学期の目標を「警察官にインタビューすることにした。「サファリ」と「word」を活用して目標シートを作成した。検索して出てきたお気に入りの警察の写真の写真を貼り付けていた。50音キーボードの習得が進んでいたため、自分が知りたいことを自力で調べることができていた。

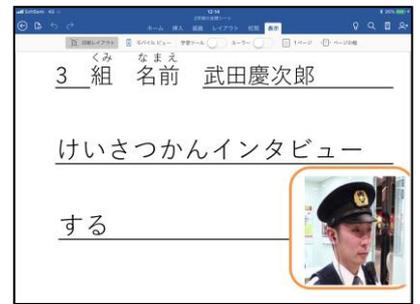


また、警察官のインタビューに向けて、聞きたいことを事前に原稿を作成したいという思いがあり、原稿を「word」で作成した。警察官へのインタビューの様子は(2)で記述する。インタビューを終えて、「Keynote」で将来の夢についてスライドを作成していった。スライドの構成は、①自己紹介(名前・年齢・家族など)②好きなもの③夢について④小学校でがんばっていること⑤中学校でが



んばりたいこと、の4つにした。「サファリ」と「Keynote」を同時に画面に表示し、検索した画像を長押しして、すぐに貼り付けられるようにした。文章を打ち込まなくても、画像を使用して自分の伝えたいことを表現していた。④小学校でがんばっていることでは、タブレットを使用して漢字や計算の勉強を進めていることを動画に撮って伝えていた。小学校でのタブレットを活用した学習支援の形を、進学先の先生が知る良いきっかけとなった。

自分の夢を軸として、興味のあることを「サファリ」で検索したり、インタビューをするために原稿を作成したりと必然性のある状況の中で、自分の思いを発信する機会を増やすことができた。また、調べたことを文字・写真(画像)・動画などでスライドにまとめていく見直しをもつことができた。



(2)自分なりに思いを伝えたり、相手の思いを理解したりするために、自分なりに手立てを活用していくことができる力をつける

学級内の女子のアイデアで、クラスにピース探偵事務所を設立することとなった。学校での困りごとを解決するのは目的である。本人の希望により、困っている人に「聞き取り」をする役目となった。今までは、「聞き取り」をする役割に進んで希望することはなかった。タブレットを活用して自分なりに相手の思いを理解する見直しをもてたことで、安心感に繋がったのだろう。

「聞き取り」に向けて、①「word」でインタビューシートを作成②インタビュー想定練習を行った。①では、担任と一緒に原稿を考え、自分で「word」に打ち込んだ。予測変換機能を活用し、要領よく原稿を作成していた。②では、作成した原稿を基に、担任が原稿を読み上げた動画を撮影した。タブレットを2台使用して、1台目は動画を再生するものとして、2台目は原稿を確認するものとして使用していた。1台目のタブレットをBluetoothヘッドホンと接続したことで、コードの煩わしさが無いことや、動画の音だけに集中できることが学習効率を高めていた。

実際のインタビューでは、事前の練習の成果があり、質問をスムーズに相手に伝えることができていた。相手の思いを理解するために、話者には「UDトーク」を使用してもらった。変換の精度を上げるために、イヤホンマイクを使用し、ゆっくり話してもらおうようお願いした。インタビューの中で「ネジ」という言葉が出てきた。すぐに「UDトーク」の画面を確認し、持っていたタブレットで画像の確認をして、話者にネジを確認していた。話者の内容を文字で確認できるのが、想起したり調べたり際に有効であった。

インタビューの後、教室に戻ると、「UDトーク」の履歴を開いて、黒板に「ネジの仕分けをしてほしい」と書いていた。テレビにタブレットを接続して、ネジの画像を映して説明をしていた。インタビューで分かったことを自分なりの方法で友達に伝えようとしていた。



ネジの仕分けの依頼の後に、給食室から別の依頼が入り、2回目の聞き取りを行った。前回と同じように、原稿は「word」で作成し、話者には、「UDトーク」を使用して、ゆっくりと話してもらった。前回の依頼は、「ネジの仕分けをしてほしい」というお願いだけだったが、今回は3つのお願いがあった。話者が「一つ目は～。二つ目は～」とわかりやすく話してくれたことで、「UDトーク」で想起しやすいようだった。

今回は黒板に依頼内容を書くのではなく、「ロイロノート」を使用して、会話内容をまとめることにした。他の児童も、発表を真剣に聞いており、メモをとっている児童もいた。「ベルマーク」が「UDトーク」で「テールマーク」と誤変換されたことで、そのまま児童たちに発表していた。発表を聞いていた児童が「テールマーク」じゃなくて「ベルマーク」ではないかというやりとりも生まれていた。

学校の困りごとを助けるという状況は、相手の思いを受信しようとしたり、自分の思いを発信しようとしたりする必然性を生むことができた。自分なりに思いを伝えたり、相手の思いを理解したりするために、自分なりに手立ての活用ができるようになってきている。

チーフのわたなべです。よろしくおねがいいたします

では、おねがいしたいことは、

みつ おねがいします。

ひとめ 一つ目

ストローの かず を かぞえて ください。



【報告者の気づきとエビデンス】

1. 思いを伝える手立てをもつことで、「伝わる」見通しがもてるようにする

○「読む・書く・話す・聞く」が向上したことにより、相手の思いがわかり、自分の思いを伝えることを支えることができたのではないか。

【読む】ひらがなの音と文字の一致が進んだことで、身の回りにあるものの名前(教科名・持ち物・先生の名前など)が読めるようになってきた。また、漢字ドリルを取り組む際、読みがわからない漢字があると、「漢字辞典」や「サファリ」を使用し、自力で読みを調べていた。

ひらがなの音と文字の一致が進んだことや、自力で調べる方法を身につけたことで、「読む」力が向上した。

ひらがな・カタカナ・漢字の読みの習得状況（平成30年4月と平成31年2月の比較）

	平成30年4月	平成31年2月
ひらがな	46文字	46文字
カタカナ	データなし	46文字
漢字(1年生の内容)	40文字	80文字
漢字(2年生の内容)	0文字	10文字

文章を話す内容の状況（平成30年4月と平成31年2月の比較）

	平成30年4月	平成31年2月
話した内容	「ら・め・ん・を・た・べ・ま・し・た。お・ い・ち・か・た・で・つ。」	「どうぶに・おばあちゃんちに・いきま した。たこやきを・たべました。おいし かったです。」
伝えたい内容	ラーメンを食べました。おいしかったで す。	土曜日におばあちゃん家に行きまし た。たこ焼きを食べました。おいしかつ たです。
特徴	文字を1文字ずつ読む。 タ行→サ行の置換あり。	意味のまとまりごとに区切って読む。 タ行→サ行の置換ないこともある。 (たまに間違えることもあるが、担任 がもう一度読みを聞くと訂正できる)

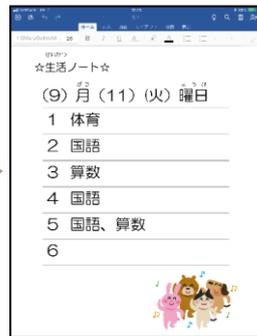
【書く】平成30年4月ころは連絡帳(日付・教科名を書く)を書くことに抵抗感があり、声かけをしてもなかなか取り組まないことがあった。連絡帳を鉛筆で「書く」から、タブレットで「入力する」に代替することで、意欲的に取り組めるようになった。

現在では、自分で連絡帳を鉛筆で「書く」または「入力する」かを選択するようになっている。また、「子どもレター」を使用し、相手意識をもって書く活動を行った際には、なぞるガイドがあれば文章を書くことができ、自力で文章を作成することができた。

「書く」→「入力する」に代替したことで「書く」ことへの意欲を高め、さらに、「手書き」に対する意欲も高めることができた。



平成30年4月の絵日記



「書く」→「入力する」



「書く」意欲の高まり

【話す】自分が話したいことを、事前に「word」や「ロイロノート」で原稿を作り、練習を行った。事前練習の様子を、自分で動画撮影し、何度も練習しようとする姿が見られた。話すことを事前にまとめたり、練習したりすることで、人前で話す自信をつけることができた。また、4月～5月頃は、「慶次郎ね～、行ったんだよ。」という主語と知っている動詞のみの発語が多かったため、担任が「どこにいったのかな?」「土曜日に行ったの?」など追加の質問をしていたが、平成31年2月現在では、「慶次郎ね～、土曜にね、妹とね、おばあちゃん家にね、行ったんだよ。」と主語と動詞の他に、「いつ・誰と・どこに」の情報を追加して話すことができるようになってきている。

【聞く】インタビューをする活動では、相手が話したことを「UDトーク」で視覚化したことで、音の手がかりと合わせて、会話内容を想起することができた。知らない言葉を自力で調べる姿も見られた。相手が話すことを耳で聞き、会話内容を視覚的に想起できる手段をもてたことで、相手の指示を正しく理解することができた。また、担任の指示で、「慶次郎君、これを〇〇先生のところに持って行ってください。もし先生がいなかったら、戻ってきてください。」という状況によって行動が変化する内容であっても、正しく理解して行動できてきている。

2. 必然性のある状況で、自分の思いを発信したり、相手の思いを受信したりする機会を増やす

○必然性のある状況で、自分の思いを発信したり、相手の思いを受信したりする経験をする中で自分の思いを「伝える」手立てをもち、「伝わる」見通しがもてるようになったのではないか。

学校での困り事を解決する「学校をお助けマン」を設置し、学校の様々な困り事を聞き取り、解決していく活動を学級で行った。役割分担の際、インタビュー係に立候補をし、困り事を聞き取る役割となった。今までの学習で使用した、「word」や「UDトーク」を使用して、聞きたいことを原稿にまとめたり、相手の困り事を正しく理解したりしようとする姿が見られた。また、聞いて分かったことをクラスみんなに、黒板に内容を書いて示したり、検索した画像を見せて説明したりしようとする姿も見られた。必然性のある状況が、自分の思いを「伝える」手立て使用しながら、「伝わる」見通しがもてたという実感を経験することができたろう。